インドネシア国ジャカルタ特別州における チリウン放水路の完成報告

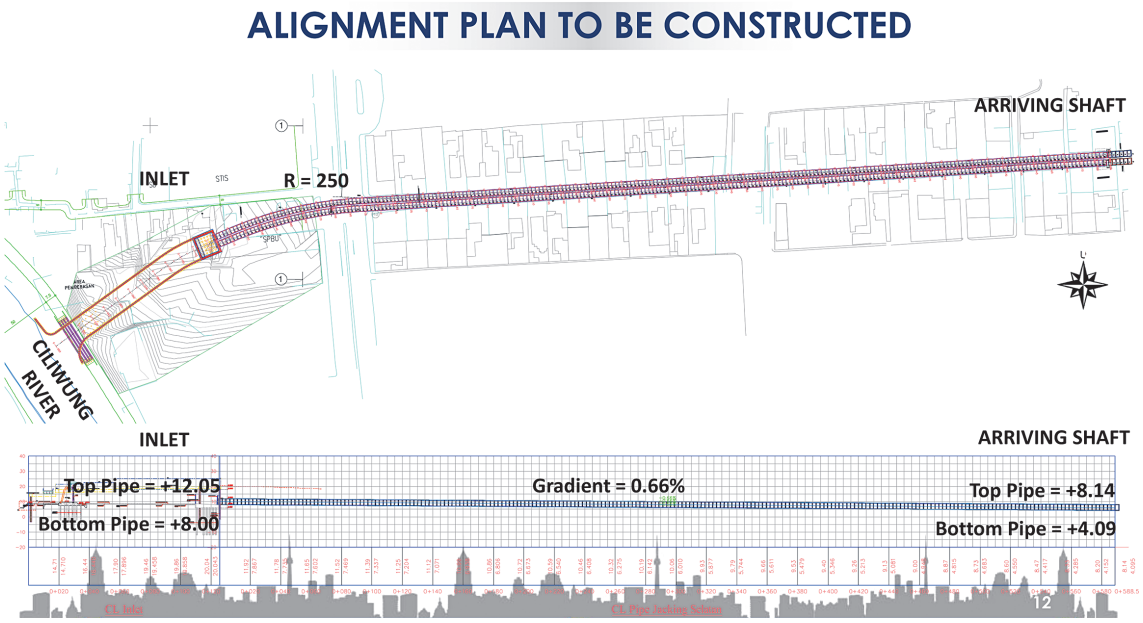
刈谷（かりや）　光男（みつお）
機動建設工業㈱
執行役員国際事業部長

1　はじめに

2015年1月21日、日本から搬入されたφ3500型泥土圧式掘進機（アルティミット1号機）が立坑下に据え付けられ、チリウン放水路建設プロジェクトの本邦チームが担当する推進が始まりました。当工事は毎年のように氾濫する旧河川チリウン川から改修済みの放水路（BKT）をつなぐ地下放水路の建設です。概要は呼び径3500の推進工法用鉄筋コンクリート管を並列に約1,200mの距離をアウトレット（放流）側とインレット（流入）側から中間立坑に向けて掘進めてつなぎます（**図－1、2**）。

最初の掘削はアウトレット側のサウスラインから始まりました。諸々の問題をその都度解決しながら6月10日に到達、引き続き同月20日にノースラインを発進して10月8日到達し、17日に掘進機を撤去してアウトレット側がつながりました（アウトレットの詳細については、本誌で度々

図－1　概要①（一部インドネシア語）今回の施工はZONA Aです



図－2　概要②

報告していますので割愛させていただきます）。

計画では、翌年インレット側の施工を行う予定でしたが、発進部の用地買収に手間取り、数年の歳月が過ぎてしまいました。

用地取得に目途がつき、2021年の年明けにコロナ禍の中でしたが、ようやくインレットの工事が動き出しました。

2　コロナ禍での準備

2021年は、年初から現地法人（国営企業）のWIKAとはWeb会議にて打合せを続けてきましたが、現場状況の把握およびアウトレットで使用した機械・材料の保管状況の確認のため、インドネシアも日本も厳しい出入国制限措置や行動制限措置等の渡航制限が課されている環境でしたが、5月中旬に約1年半ぶりで渡航しました。インドネシアへの入国に際しては、5日間指定ホテルでの強制隔離、帰国時には2週間の自主隔離が課され、また、両国とも出入国時にPCR検査も義務付けられていました。

また、ジャカルタでの打合せ時には客先からアンチゲン検査の陰性証明も求められました。その後も渡航制限の中、個人としてはコロナワクチンを積極的に接種して隔離生活にも耐えながら10月と翌年1月に再度渡航し、不足材料の洗い出し、数年間放置した機械整備および施工打合せと、それらに伴う金額交渉等々を進めていきました。

機械の整備については、3月20日から1号掘進機（国土開発工業㈱）と油圧機器、滑材用機器、加泥装置など、4月20日からは圧送ポンプと1号掘進機での推進が開始している7月には、2号掘進機（奥村機械製作㈱）の整備をそれぞれ行いました。コロナ禍で、感染リスクが高い渡航しての整備でしたが、アウトレット施工時にそれぞれの納入協力企業の方々がジャカルタまで出張していただき、工事の着手に間に合うことができました（**写真－1**）。

写真－1　着工式